九州の歴史民俗を考える
―久留米大学公開講座ノートより―

福山裕夫[1)]・綾杉るな・伊藤まさ子・内倉武久・古賀達也・福永晋三・正木裕[2)]

Recent Topics About Ancient History, Folklore in Kyusyu Island, Japan
: Abstracts in the Open Lecture of Kurume University

Hiroo Fukuyama[1)], Luna Ayasugi, Masako Ito, Takehisa Uchikura
Tatsuya Koga, Shinzo Fukunaga, Hiroshi Masaki[2)]

【キーワード】 炭素年代法、年輪年代法、人類遺伝学、熊襲、隼人、九州王朝、邪馬台国、高良山、宇佐八幡、大宰府、隋書倭国伝、推古天皇

巻頭にあたって　　福山裕夫

2007年より久留米大学においては、市民に広く知の実践を提供するため、さまざまな分野において公開講座を実施している。それらのさまざまな取り組みの中でも、歴史、民俗学をはじめ、九州を中心とした古代史に付いては、多くのオーディエンスに参集いただき現在においても人気の講座の一つである。

1990年代のいわゆる古代史ブームに端を発した「九州王朝論」については、4回にわたり昭和薬科大学　故　古田武彦教授に講師に招き、氏の膨大な著作を中心として、熱心な講演をいただいた。いわゆる「古田史学ファン」をはじめとする多くの九州の古代史に興味を持たれる方々からは、フロワーからの活発な質問をいただき、講演後においても古田先生のおかれては、一見簡単とも感じられる市民の皆さんの問いであっても、丁寧に話をされていた姿を思い出すと氏の誠実さと熱心さに敬服したものである。その後も、佛教大学　黄　當時教授（HUANG Dangshi)、宮崎公立大学　故　奥野 正男教授など、アカデミックに限らず多彩な研究者、著述家の方に講師をお引き受けいただき、著者においてもその末席にて市民の皆様の耳を汚すこととなり恐縮の限りである。

さて、2000年代に入りこれら古代史の分野については、これまでの技法を用いた考古学や限られた資料を解釈探求する文献史学と異なり、年輪年代法、放射性同位元素を用いた炭素年代法など様々な科学的手法が用いられるようになった。本邦における稲作に起源をBC1000年とした2002年歴博の発表は、学術論文を見る限りにおいても多大なインパクトを与え、多くの資料館ではいわば併記の年代観での展示となっている。これら科学技術を駆使した考古学の発展は、中華人民共和国における「殷、周プロジェクト」にもおよび、ほんの

1）　久留米大学　比較文化研究所
2）　大阪府立大学

十数年前まで神話、まぼろしとして定義されていた中国古代王朝も科学的エビデンスを持って証明されることとなっている。

2015年-22年という近々においても、人類遺伝学を中心とした歴史科学の分野の発展はめざましく、BC2000前後に台湾をでた人類は南アメリカに到達していたり、東南アジアに展開した人類はマダガスカルにいたることなど、目を見張るものばかりである。また、2021年サイエンスにおいては日本人３重構造説、いわゆる「Kofun jin」が提唱され、これらの中心となる北部九州から近畿におよぶベルト地域と、その他の国内地域における遺伝学的な差異が明らかになっている。このことは、神話、伝説、古文化など考古学的、民俗学的に北部九州の再検討を要する学問的課題となることは明白であろう。

上記の内容を踏まえて、今回、2021-2022年におけるアブストラクトを改めてまとめることとした。それぞれの、講師の方々には多大な尽力をいただいた。また、巻末に先生方の著作物を紹介した。

第１話　『高良玉垂宮神秘書』概説　綾杉るな

はじめに

高良大社から発行された『高良玉垂宮神秘書・同紙背』について、本講座において『高良玉垂宮神秘書・概説』という演題で講演を行った。

要旨

● １章「高良玉垂宮神秘書」の成立・背景・構成

最終編者は大祝職物部神津麿尊保房で、成立は中世末期から近世初期（1596年～1646年の間）と考えられる。執筆した状況として、保房の前に老人が三日間現れて、天地開闢から未来まで話したので、これを紙に書きつけた。老人が高良大菩薩であることは「仁徳17代９月13日に遷幸した者」ということで分かった、と説明している。

その時代背景を見ると、1586年、高良山が島津義久に攻め落とされて座主が脱出した事件、1587年、秀吉が島津討伐の途中「吉見が岳」に在陣した折、座主らが内甲を着けていることが発覚して所領を没収された事件、1591年、座主鱗圭が久留米城主に誘殺されて所領を没収された事件が起きている。これら危機的状況があったために、大祝家に高良山の歴史を残そうという機運が生じ、託宣という形を採って本書が編纂されたと考えられる。

『神秘書』の全体構成はおおまかに三つに分けられる。

冒頭（１条）　住吉神（底筒男）を高良大菩薩として神功皇后を妻とする。

本体（２条～549条）　各時代に書き残されていた史料を並べたもの。

巻末（550条～551条）　１条とは別系統の系図と成立事情を述べたもの。

もともとあった本体部に、表紙のように冒頭と巻末を後から付加した構成となっており、１条と550条では系図が異なる矛盾がある。

● 2章　祭神　上宮と下宮　玉垂命と高良の神は別神

現在の高良大社の祭神は玉垂命、八幡大神、住吉大神で、下宮社は高良玉垂命、孝元天皇、素戔嗚尊となっている。矢野一貞は「上の高良は玉垂、下の高良は武内宿禰」と記す。下宮社については「御井町誌」にも「大正11年、主祭神はかつて武内宿禰だったのを高良玉垂命、物部膽咋連命、武内宿禰とした。」とある。上宮の「玉垂命」と下宮の「高良の神」は別神で、「高良の神」とは武内宿禰の事である。

● 3章　玉垂命とはアントンイソラ（安曇磯良）である

玉垂命とは安曇磯良である。安曇磯良といえば覆面の神だが、その磯良が高良玉垂宮縁起絵巻の「中央」に描かれている。磯良が玉垂命である証拠としては、祭礼の時に祭神に「覆面の巾一疋」が献上されること、高良大菩薩が大川の酒見で波風神を納め、風浪宮の始まりとなったことなどが挙げられる。波風神（海神）を祀ることが出来るのは安曇族しかいない。

社号の「玉垂宮」は海神から授かった干珠満珠を持ち込んだことから付いた。

● 4章　仲哀天皇の三種の神器のゆくえ

仲哀天皇の崩御後の三種の神器について、神璽（勾玉）は安曇磯良が、宝剣は神功皇后が、内侍（鏡）は玄孫大臣（武内宿禰）が預かった。勾玉は干珠満珠と共に磯良が上宮に持ち込み、「山上の一火」となって当山を巡って照らした。鏡は武内宿禰が子供の日往子に伝世し、「麓の一火」となって麓を巡った。これが「秘すべし」の内容の一つである。

● 5章　玉垂命と神功皇后

玉垂命は半島から凱旋すると、神功皇后と共に大善寺に着き、祇園山古墳の丘に着御。のちに宇美を経て都に上った。神功皇后が崩御すると、玉垂命や武内大臣は皇宮を出た。

● 6章　高良山遷幸は9月13日

玉垂命は大善寺に戻って船を調べ、黒崎で住むべき所を占って9月13日に高良山に移った。高良山の名前の由来は「善き高山なり」と言ったことから付いた。最初は住厭に住んで四方の固めを行い、「八葉の石畳」（いわゆる神籠石）を造り、三年後に住み飽きたと言って、現在の上宮の場所に移った。

● 7章　玉垂命の最期と墓所

玉垂命は死期を悟ると大善寺を御廟と観念して、御輿で行って御座船を調べ、棚など燃やさせて、香椎朝妻（神功皇后）を祀った。これに呼応して実際に高三潴には玉垂廟があり、高良御廟塚がある。かつては牡蠣殻で覆われて真っ白だったというのも、安曇磯良が白い牡蠣殻で象徴されることと関連があるだろう。

● 8章　九躰皇子

九躰皇子について、1条では神功皇后が一人で九人の子を生んだとする。四人の父は仲哀天皇、五人の父は底筒男だが、一人で九人の子を生むのは無理な話である。九躰皇子を祀る高良御子神社では「九躰皇子とは玉垂命の御子である」とし、母の名は記していない。安曇磯良が当山で複数の夫人を娶り、九人の子が生まれたと解釈するのが妥当であろう。

● 9章　白鳳2年（白鳳13年）　高良大明神が出家して大菩薩になった

天武天皇即位二年（673）、正月15日に物部美濃理麿保続は斗藪の比丘と秘かに約束して出家した。2月8日、「高良大明神は発心して高良大菩薩となり、『俗体を保続に譲る』と託宣

した。」と宣言。これによって、物部氏と大菩薩は同姓となり、大菩薩も物部氏だと言い換え、祭神は安曇磯良から武内宿禰に変わった。大菩薩の発心した癸酉（673）を示す年号として、白鳳２年と白鳳13年が出て来る。これは当山で「二中暦」と「寺社暦」の二種類が使われていたためで、両者には11年の誤差がある。混乱を避けるために、必ず「天武天皇四十代即位二年」や「癸酉」などを付記する工夫がなされている。

● 10章　物部を秘す　安曇氏から物部氏になって生じた矛盾

物部氏が大菩薩と同姓であると主張するようになると、古来の五姓と矛盾が生じるようになったため、「物部を秘すためである」と説明するようになった。

● 11章　宇佐八幡に九州宗廟を譲る

天平勝宝元年（749）、宇佐八幡の社が建立されてから、高良は九州宗廟の御司を譲った。（281条）これ以降、八幡神と住吉神信仰が高良山に入り、底筒男を大菩薩とした。

おわりに

冒頭と巻末の違いを押さえれば、『神秘書』は高良山の歴史を明かす重要な書となる。

第２話　九州とは何かを考え続ける　　伊藤まさ子

はじめに

著者が遺跡に興味を持ち始めたのは、実家の庭先で縄文土器や石器を表採できたことによる。その後、九州の腰岳から隠岐島や北海道の夕別川まで沢や道端に黒曜石を拾いに行った。ついでに博物館を訪ねて弥生や古墳時代にまで興味を持ち、日本書紀から万葉集まで興味が広がった。また、旅に必要な地図には歴史的な地名があふれていた。地図上の福岡平野には弥生時代中期の首長墓（弥生王墓）とされる須玖岡本遺跡と吉武高木遺跡がある。両者は日出の宝満山頂と日没の飯盛山頂の東西二点を結ぶ直線の上に離れて並んでいた。この直線は飯盛山を越えて糸島市の三雲南弥生王墓を貫き一貫山銚子塚古墳の後円部墳丘に届く。三か所の弥生王墓と前期古墳を結んだのである。しかも、このような現象は九州のみに限られるのではなかった。つまり、古墳時代を通してこの思想や文化が各地に伝播していったと思われた。大げさに言えば、九州の文化の一部が古墳時代に東に広がったとも考えられる。公開講座では主に「九州とは」について講演を行った。

要旨

● 延喜式内社から見える九州の古代王朝（2012）

九州では福岡県に延喜式に記載がある名神大社が集中する。箱崎宮・志賀海神社・織幡神社・三奈宜神社・林田三奈神社・大己貴神社・宗像大社・高良大社・筑紫神社・若久住吉神社・住吉神社・麻弖良布神社・竈門神社・見勢大霊石神社などであるが、このうちの二か所を直線で結ぶと直線の延長線は悉く古代の神山（宝満山・若杉山・脊振山・馬見山・飯盛山・

天拝山･宮地岳）に行き着く。醍醐天皇代の延喜式に記載された神社を延喜式内社と呼ぶが、皇統の安寧と繁栄を願うために奉幣される神社である。しかし、林田三奈宜・三奈宜・馬見山の延長線は岩戸山古墳にも行き付くのである。岩戸山古墳は風土記にも書かれた逆賊の墓である。その墓と式内社が結び付くのは、式内社が禍を成す霊力の断絶を担っていたためと考えた。つまり九州における式内社の位置と役割を根本的に見直したのである。

醍醐天皇は菅原道真の祟りを恐れて天満宮を造営させ、同時に式内社として筥崎宮を遷宮し造営させたという。が、実は筑紫の神山の霊力を恐れていた。皇室に対抗した古代の王家の神が皇室に禍をなしていたと考えた。皇室の繁栄を願う式内社からの直線は道真を祀る天満宮に当たることはなく、古代九州の神山に当たる。醍醐天皇がおそれた天神の祟りとは、菅原道真というより九州の神々の祟りだったのではないだろうか。裏返せば、筑紫には式内社が展開する地域に古代権力が存在したことになる。その霊力を抑えるために奏上されたのが式内名神大社だった。醍醐天皇の御代（十世紀）九州における延喜式内名神大社の指定及び建立は、九州に古代権力あったことを暗示してくれた。

● 万葉集と倭国（万葉集から見える九州王朝）（2014）

旧唐書にあった倭国。倭国と日本国は別国である。しかし、倭国はいつの間にか消えている。国号変更の記述は書記には見られない。白村江敗戦後に郭務綜が筑紫で奉った函は「倭王」宛である。倭王は日本王ではない。倭国の中心は何処にあったのか。最古の歌集である万葉集に倭国の痕跡があるだろう。和歌が倭国の歌だったなら、集中の枕詞は倭国の風俗を反映していたはずである。それを分析すれば、倭国の位置も明らかになるだろう。そこは訓読み漢字の文化圏で、訓仮名が早くから使われていた。枕詞「ぬばたま」の意味と使用した歌人、「世間」を「よのなか」と詠んだ歌人、川原寺の倭琴の裏に遺された歌、倭道と日本道を使い分けた意味などを手がかりに万葉集に残された倭国の痕跡を探した。特に、集中に八十余首使われている枕詞「ぬばたま」を取りあげて考えた。

● 墓制から見る九州の古代

磐井の乱後の６世紀半ば以降に前方後円墳が円墳（装飾古墳）に変わり、横口式家形石棺が装飾古墳と入れ替わるように消えるのはなぜか。筑紫君磐井を滅ぼした勢力は何処から来たのかを、墓制の変化を取り上げて考えた。大きな社会変動に伴い墓制が変わるということである。九州では何度も墓制が大きく変わっている。そのたびに権力者が交代したことになるのだろう。然も、磐井の乱後に侵入して来たのは肥後の勢力だった。墓制の変化から読み取れたのは、「倭国は二度滅びた」であった。

● 朝鮮式山城から見える九州の古代

九州を中心に西日本に点在する神籠石系の古代山城は、何時だれが何の目的で造ったのかが謎のままである。最近は「朝鮮式山城は天智帝の代に、神籠石系山城は天武持統朝に築造された」と言われている。これまでに神籠石系山城と朝鮮系山城は別の目的や勢力によって構築されたと多く自治体が紹介し、両者の違いは長い間強調されてきた。神籠石系山城には共通点が多々ある。削平や住居跡なし、列石加工と石組技術などから同じ目的で北部九州を中心にした同じ権力の指令のもとに同じ時期に作られたと考えられる。しかし、その共通する築造技術は、直接には後世には伝わっていない。その技術は何処に伝播したのか今後の課

題である。また、正史に記された朝鮮式山城である大野城から出土する古代の瓦に焦点を当てて、九州の古代を考えた。大野城は大宰府政庁と同じく三度の建て替えがあり、まだ宮殿に瓦が葺かれる前に、山城に礎石を据え瓦を葺いた。不思議なことである。古代寺院の瓦の胎土や製造技術や文様の変遷などを取り混ぜて朝鮮式山城について考えた。

● 「杵島山と筑波山」風土記と万葉集から見える常陸の国

大化改新前の常陸国は有明海文化圏と深いつながりがあったことを、常陸国風土記に書かれた阿蘇の神の子孫である建借間命と杵島曲で確認し、ひたちなか市の虎塚古墳で「装飾古墳文化の常陸国への伝播」を考えた。また、肥前・摂津・常陸の三大歌垣の山の伝承や、肥前国風土記逸文などから「杵島曲」が全国に伝播したしたことを確かめた。更に、七世紀の政変を常陸国風土記から読みとり、同時代の東歌と防人の歌から過去の王権の国策と行政組織を読み込んだ。それは、九州の古代王権と深く関わっていたのである。

おわりに

人は少なからず「生まれ育った地域の歴史や文化」に興味を持ち、多くの無形文化財や遺跡や史書や古文書など様々に過去を知る手掛かりが在ることに気が付き、地形や地名や伝承には歴史を紐解く鍵が残っていることにも思い至る。ところが、その受け継ぎ守っていく担い手は減少しており、本公開講座にその担い手としての触発を期待したい。

第３話　九州倭政権解明のカギ　　内倉　武久

はじめに

1970年代、古田武彦氏によって提唱された九州王朝説は多くの支持者を得つつも、従来の学説を真っ向から否定するものであり、日本という国の成り立ちに厳しい疑問を投げかけるものであった。『日本書紀』に記された〝記録〟をすべて近畿大和政権の話と誤読した従来の国史学者や考古学者は研究者としての資質そのものを問われる事態となり、学界あげての猛反発と無視を招いた。しかし、古田説を支持する人々の意見も百花繚乱、という状態で、九州政権の実態についての意見は未だに統一には至っていない。

著者は、古田説は真実の日本の古代史に迫るものと確信し、公開講座を通じて九州政権にまつわる多くの新しい事実、新しい見解について講演を行った。

要旨

● 第一に、九州政権の首都が太宰府にあった事である。太宰府は別名を「都府楼」という。「都府」というのは貝原益軒が指摘しているように「都督（ととく）が率（ひき）いる官庁街」の意味である。日本列島にはここにしかない地域の名称である。「都督」は中国王朝の官位のひとつで、天子の名代（みょうだい）として一定の地域を支配する役目である。日本の古代史の上で著名な五世紀の「倭の五王」のうち済（せい）と武（ぶ）が授号している。当然、

列島を支配した済と武らは太宰府にいたことになる。

実は、この小生の考えは補足しなければならないことが後になってからはっきりした。九州政権の都は太宰府だけではなかったのだ。15年５月の講座でお伝えしたが、六世紀の継体天皇の都は筑後川中流域の朝倉市にあったのだ。継体はそれ以前の支配者磐井を打ち負かして権力を奪い、九州年号を創始した。さらに次の安閑天皇の都も継体の都から北へ山一つ越した田川郡香春町にあったことがはっきりした。「勾（まがり）金（かね）の箸（はし）の宮」である。さらに都は六世紀末、福岡県の東端、京都（みやこ）郡に移った。このことはまだお伝えしていないので、今後の講座で紹介したい。

● 第二に従来、学校で「わ」と読むように指導されていた「倭」は、本当は「ヰ（い）」と読むべき漢字であることだ。中国の正史はすべて北方中原の洛陽や長安で著述されている。ここは「漢音」地域である。「わ」と読むのは南部の「呉音」地域の読み方である。藤堂明保は自らの中国の言語研究者としての地位を獲得するためもあってか、国史の大御所らに媚び、「呉音は本来洛陽地域で使われていた読みである」などと奇妙な、中国の言語研究者が誰一人として肯定しない説をふりまき、「倭はワと読んでよい」などとした。後漢に著述された『説文解字』にはっきりと「倭」は漢音で「ヰ」と読むべきことが記されていることをお伝えした。「倭」を「ヰ」と読むことによって初めて『旧唐書』の「倭はいにしえの倭（い）奴（ど）国である」と言う意味がはっきりとらえられる。すなわち済や武の「倭国」は前身の「伊都国」が「倭国の大乱」を経て作り直された国であったのだ。もちろん、日本側として国名を「倭」としていたとは考えられない。「壹国」とか「伊国」あるいは「井国」であったろう。

● 第三に、邪馬壹国の女王「卑弥呼」は中国・周王朝家の血を引く人であったことをお伝えした。中国の史書『魏略』や『晋書』などに「倭の人は自ら、我々は太伯の子孫である、と言っている」と記録される。「太伯」は周王朝の皇子で姓は「姫」。跡目相続争いに敗れ、南方に逃避して「呉国」を造ったとされる。

すなわち「卑弥呼」の勢力は「姫（紀）氏」一族であったと推定されるのだ。紀元前五世紀、最初の渡来地は熊本県菊池市一帯（広域の山門（やまと）地域）であったと『松の連（むらじ）・姫氏系図』は伝える。約六百年かけて勢力を拡大し、「卑弥呼勢力」が誕生した。日本を「東海紀氏国」と読んだ例もある。

● 第四に、伊都国の王家の人であった「五（い）瀬（せ）（伊勢）命」「狭（さ）の命（後の神武天皇）」らを近畿大和に追いやったのは卑弥呼らであったと推定した。「倭国の大乱」の「大乱」は、漢語では「臣下が君主を犯す乱」、すなわち「政権奪取」を意味するからだ。伊都国を構成、従属していた国々ひとつであった「卑弥呼の国」（魏志倭人伝にいう鬼国？）が、宗主国であった伊都国の支配権を奪ったと解釈できる。

● 第五に、卑弥呼政権後に誕生した「倭（い）国」はどんな人々が主導していた国だったかの問題である。トップには天（あま）（海人）族が座っていたらしい。七世紀初め、日本の権力、世情の調査に訪れた中国・隋（ずい）の使者の報告が『隋書』に記録されている。それによると倭国の「天子」は姓を「阿毎（あま）」という、とある。ずっと天族が天皇位を保っていたかはわからないが、皇族の主要メンバーであったことは間違いなかろう。

次に第二の勢力は熊曾於（熊襲）族である。中国山東省、江蘇省などに蟠踞していた人々である。敵対していた漢民族から犬（けん）戎（じゅう）とか西戎とかの蔑称で呼ばれていた族である。元来は中国北方から沿海部にかけて幅広く住んでいて、強大な力を誇っていた。周の国を攻撃して分裂状態に追い込んだこともある。漢民族にとって恐るべき敵であった。漢民族に圧迫され、縄文時代晩期ごろから弥生時代にかけて新天地を求めて続々九州南部にやってきたらしい。先住の天族や後続の紀氏らと通婚して「九州人」、そして「日本人」になったのだ。歴代の「天皇」はこの三つの大族の誰かが勤めていたと考える。先述の「継体」と「安閑」両天皇はほぼ間違いなく熊曾於族出身の天皇である。

従来の国史研究者らは、日本人は天から舞い降りたとでも言いたげにこの辺りのことを閑却し、大和政権が作った客観性ゼロの『日本書紀』がなぜ熊曾於族を野蛮人風に描いているかに考えがおよばないようである。長らく大和勢力を押さえつけ、蔑視していた不倶戴天（ふぐさいてん）ともいうべき敵であったからであろうか。

おわりに

著者の所感からすれば、在地の考古学者らの一部には〝中央〟の研究者らに媚び、或は認識不足や保身のために世界中の年代測定の切り札である放射性炭素の年代測定を避け、事実とは程遠い古代史を説き続けようとしている人たちもいるように感じる。このことは、いわば市民に対する背信行為とも感じられ、次期明らかになるであろうという残念な気持ちになってしまうことを、最後に改めて記したい。

第４話　筑紫なる「遠の朝廷」 ―倭国の両京制の考察―　古賀達也（古田史学の会）

はじめに

今回、久留米大学公開講座において、以下のように講演を行った。

要旨

● 倭国（九州王朝）と日本国（大和朝廷）

倭国（九州王朝）から日本国（大和朝廷）への王朝交代を『旧唐書』倭国伝・日本国伝では次のように記しており、その時期を八世紀初頭（701年・大宝元年）とする説を古田武彦は発表した（注①）。

－ 「倭国は古の倭奴国なり。京師を去ること一万四千里、新羅東南の大海の中にあり、山島に依って居る。（略）四面に小島、五十余国あり。皆これに附属す。その王、姓は阿毎氏なり。一大率を置きて諸国を検察し、皆これに畏附す。官を設くる十二等あり。（後略）」『旧唐書』倭国伝

－「日本国は倭国の別種なり。（略）或いは云う、日本は舊（もと）小国、倭国の地を併す。（略）長安三年（703年）、その大臣、（粟田）朝臣真人が来りて方物を貢ず。（後略）」『旧唐書』日本国伝

倭国は建国（天孫降臨）以来、北部九州（筑紫）を拠点として、五世紀（『宋書』倭の五王時代）には関東まで領域を拡大し、その都は一貫して筑紫（筑前・筑後）に置かれたと古田は指摘する。本講座では、古田説に基づき、万葉歌に見える「遠の朝廷」が倭国の両京制という視点により穏当な解釈が可能とする講演を行った。

● 倭京（太宰府）と難波京（前期難波宮）

七世紀前半には太宰府条坊都市の造営が始まり、その地を都（倭京）とした（注②）。そして、七世紀中頃には全国統治のため、新たな行政単位「評制」（注③）を施行したことが出土木簡や古代史料から判明している（注④）。　評制による全国統治は、列島の中心部にあり交運の要衝でもある難波京（前期難波宮）で始まったとされるが（注⑤）、そうであれば難波京は評制を採用した倭国の都ということになろう。他方、前期難波宮を孝徳天皇の宮殿とする通説においても、その規模と様式は近畿天皇家の王宮の発展史から逸脱したものとされ、それ故に創建年代を天武期とする論者もあったが（注⑥）、「戊申年」木簡の出土や水利施設の木枠材の年輪年代測定により、孝徳期造営説は決定的となった（注⑦）。しかし、近畿天皇家の王宮の発展史から前期難波宮は逸脱しているという問題を通説では解決できていない。

他方、倭国が七世紀に造営した二つの条坊都市、倭京（太宰府）と難波京（前期難波宮）の創建を祝うかのように九州年号が改元されている。次の通りだ。

倭京元年（618年）＝太宰府（倭京）遷都　（『二中歴』年代歴）
白雉元年（652年）＝前期難波宮（難波京）遷都
（『日本書紀』と芦屋市出土「元壬子年」木簡）

ちなみに前期難波宮が焼亡した686年も改元され朱鳥元年となる。こうした改元年との対応は、前期難波宮が倭国による造営であったことを裏付けるものであろう。なお『日本書紀』によれば、孝徳天皇白雉元年（650年）二月条に大々的な白雉改元の儀式を挙行しているが、これは九州年号の白雉元年（652年）二月条の白雉改元記事を二年移動して転用したものであることが、芦屋市三条九ノ坪遺跡出土「元壬子年」（壬子年の652年が元年）木簡により明らかとなった（注⑧）。従って、652年の前期難波宮創建により、倭国は倭京（太宰府）と難波京（前期難波宮）の二つの都を持つ両京制（複都制）を採用したと考えられる。

● 権威の都（倭京）と権力の都（難波京）

倭国が採用した両京制には隋・唐での先例がある。西の長安と東の洛陽からなる両京制だ。それは権威の都・長安と権力の都・洛陽であり、二つの都で権威と権力の機能を分担したという（注⑨）。倭国の場合は、権威の倭京（太宰府）と権力の難波京（前期難波宮）とする

両京制と考えられる。なぜなら、評制での全国統治にふさわしい立地条件と規模を有するのは難波京であり、筑紫なる倭京は天孫降臨以来の伝統を持つ古都であり、倭国の権威の淵源の地だ。この権威と権力を分離するという政治思想は三世紀の邪馬壹国の時代に採用されたことが倭人伝に見える。

「その国、本はまた男子を以って王と為す。住みて七、八十年、倭国は乱れ、相攻伐して年を歴る。すなわち、一女子を共に立て王と為す。名は卑弥呼という。鬼道に事（つか）え、よく衆を惑わす。年、すでに長大にして、夫婿なし。男弟有りて国を治むるを佐（たす）く。」『三国志』倭人伝

これは女王卑弥呼と男弟による姉弟執政だ。次いで六世紀末から七世紀初頭での兄弟による統治が『隋書』俀国伝に見える。

「俀王は天を以て兄と為し、日を以て弟と為す。天未だ明けざる時、出て政を聴き、跏趺坐し、日出づれば便（すなわち）理務を停め、云う『我が弟に委ねん』と。」『隋書』俀国伝

これらの史料により、権威と権力を分離した統治機構が古代日本で採用されていたことがわかる。

● 『万葉集』に見える両京制の痕跡

倭国の痕跡は、万葉歌に筑紫大宰府が「遠の朝廷（みかど）」と歌われていたり、『養老律令』に大和朝廷の神祇官に相当する「大宰の主神」という、他に見えない官職として遺っている。こうした史料状況は倭国の両京制により説明可能だ。たとえば柿本人麿の次の万葉歌は示唆的だ。

[歌番号] 巻三　0304
[題詞]（柿本朝臣人麻呂下筑紫國時海路作歌二首）
[原文] 大王之 遠乃朝庭跡 蟻通 嶋門乎見者 神代之所念
[訓読] 大君（大王）の 遠の朝廷と あり通ふ 島門を見れば 神代し思ほゆ

この歌は通説では、人麿が「大王（おおきみ）」と呼ぶ、ある天皇の「遠の朝廷」が舞台であり、この「遠の朝廷」とは筑紫にある「地方の役所」と解釈するようである。「遠の朝廷」が筑紫にあることはその題詞からも、山上憶良上歌（注⑩）や大伴家持歌（注⑪）に見える「遠の朝廷」と「筑紫の国」の用例からも妥当な理解と思われる。

しかしながら、「遠の朝廷」を筑紫にある「地方の役所」とする解釈は、「朝廷」の字義からは導き出せない。通説がこうした無理な解釈に至った理由は、思うに、人麿の時代の天皇（天武・持統・文武）は大和から遠く離れた筑紫に「朝廷」を置いたことなどなく、そのため「地方の役所」と解釈せざるを得なかったのではあるまいか。そこで、歌そのものに沿って

人麿の認識について考えてみることにする。人麿歌から見える情景は次のようだ。

- 人麿は歌人として「大王」に仕えていた。
- その大王は「朝廷」とは別に、遠く離れた処に「遠の朝廷」を置いていた。すなわち、支配領域内に二つ以上の「朝廷」があった。
- 「朝廷」とあるからには、人麿が仕えた「大王」とは、当時の日本列島を代表する最高権力者と考えられる。
- 当歌の題詞（柿本朝臣人麻呂下筑紫國時海路作歌二首）や他の万葉歌に見える「遠の朝廷」の歌詞から、「遠の朝廷」は筑紫に置かれていたことがわかる。
- 「島門を見れば 神代し思ほゆ」と歌われていることから、その地は神話の舞台とされており、筑紫（糸島・博多湾岸）を舞台とする「天孫降臨」神話と思われる。

このような人麿歌の情景は、次の論理的帰結へと誘う。

- この「大王」は大和の天皇（天武・持統・文武）ではない。なぜなら、彼らが筑紫に「朝廷」を置いた形跡はない。
- 従って、この歌に詠まれた「大王」は、神話時代以来、筑紫に君臨し、太宰府に都を置いた倭国（九州王朝）の「大王」のことと考えざるを得ない。
- 人麿がこの歌を作歌したとき、その「大王」は筑紫の「遠の朝廷」ではなく、別の「朝廷」にいた。そうでなければ「遠の朝廷」という表現は成立しない。
- 「大王」がいた別の「朝廷」の最有力候補は、本稿で論じた倭国の複都、前期難波宮ではあるまいか。
- こうした理解が正しければ、この歌が詠まれた時代は前期難波宮活動期（653～686年）となる。

以上の考察によれば、人麿歌の「遠の朝廷」は倭国の両京制を前提としたとき穏当な解釈が可能となる。そしてその両京とは筑紫神話以来の伝統を継ぐ「権威の都（倭京・太宰府）」と評制による全国統治のための「権力の都（難波京・前期難波宮）」のことと考えられる。

おわりに

以上の講演についてまとめたが、今後も同内容について探求していきたい。

（注）

①古田武彦『失われた九州王朝』朝日新聞社、1973年。ミネルヴァ書房より復刻。

②井上信正（太宰府市教育委員会）によれば、太宰府条坊はその北部の政庁や観世音寺に先行し、藤原京（694年遷都）と同時期の成立とする。倭国の年号（九州年号）には「定居（611～617年）」「倭京（618～622年）」が見え、その字義から、倭京（太宰府条坊都市）がこの時期に造営されたとする研究をわたしは発表した（『「九州年号」の研究』古田史学の会

編、2012年。『発見された倭京 ―太宰府都城と官道』古田史学の会編、2018年)。

③行政単位を国・評・里とする制度で、大和朝廷へ王朝交代した701年からは、「郡制」(国・郡・里)に一斉変更された。この大変化を『日本書紀』は記述していない。前王朝(九州王朝)の存在と王朝交代を秘す(認めない)ための編纂方針と考えられる。

④古賀達也「文字史料による『評』論『評制』の施行時期について」『古田史学会報』119号、2013年。古田史学の会HP「新・古代学の扉」に収録。

⑤『皇太神宮儀式帳』(延暦二三年、804年成立)に「難波朝廷、天下立評給時」(難波にあった朝廷が天下に評制を施行した時)とあり、難波に朝廷が置かれた七世紀中頃、その朝廷により評制が施行されたとする史料である。九州王朝説に立てば、七世紀は倭国(九州王朝)の時代であり、評制を施行した難波朝廷は倭国(九州王朝)の朝廷となる。

木原克司「我が国における条坊制都市の成立をめぐって」『人文地理』39-5、1987年。

小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』2005年。

山尾幸久「『大化改新』と前期難波宮」『東アジアの古代文化』2007年。木原、小森、山尾は前期難波宮天武朝造営説。

⑦『難波宮址の研究　第十一』大阪市文化財協会、2000年。

⑧古賀達也「白雉改元の史料批判 盗用された改元記事」『古田史学会報』76号、2006年。
同「二つの試金石 九州年号金石文の再検討」『「九州年号」の研究』古田史学の会編・ミネルヴァ書房、2012年。

⑨村元健一「隋唐初の複都制 ―七世紀複都制解明の手掛かりとして―」『大阪歴史博物館研究紀要』2017年。

⑩『万葉集』巻五　794

[題詞](略)

[原文] 大王能 等保乃朝廷等 斯良農比 筑紫國尓 泣子那須(後略)

[訓読] 大君(大王)の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす(後略)

[左注] 神亀五年七月廿一日 筑前國守山上憶良上

⑪『万葉集』巻二十　4331

[題詞](天平勝寶七歳乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌)追痛防人悲別之心作歌一首[并短歌]

[原文]天皇乃 等保能朝<廷>等 之良奴日 筑紫國波 安多麻毛流(後略)

[訓読] 大君(天皇)の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国は 敵守る(後略)

[左注] 右二月八日兵部少輔大伴宿祢家持

第５話　邪馬台国九州説の再考　　福永晋三

はじめに

戦後七十有余年、どちらかというと、邪馬台国畿内説が声高に叫ばれてきた感がある。し

かしながら、戦前までの邪馬台国九州説と同畿内説の拮抗を振り返るとき、戦後ももう少し九州説を唱えた方が穏当の気がする。今回は、『隋書』倭国伝と推古天皇紀を取り上げ、邪馬台国九州説を再考してみた。

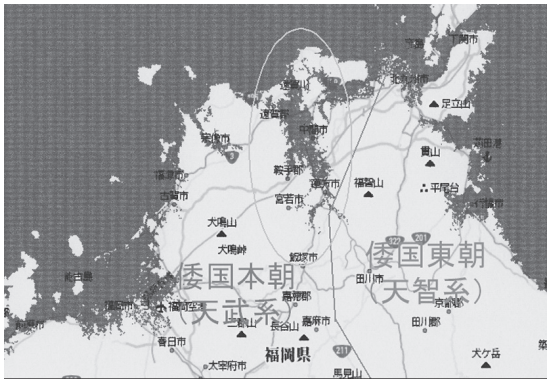
要旨

● 「記紀には豊国・筑紫国が書かれている」

倭國在百濟新羅東南水陸三千里於大海之中　依山島而居　魏時譯通中國三十餘國　皆自稱王　夷人不知里數但計以日　其國境東西五月行南北三月行各至於海　地勢東高西下　都於邪靡堆　則**魏志**所謂**邪馬**臺者也　古云去樂浪郡境及帶方郡並一萬二千里在會稽之東與儋耳相近漢光武時遣使入朝自稱大夫　安帝時又遣使朝貢謂之倭奴國 桓霊之間其國大亂遞相攻伐歴年無主　有女子名卑彌呼能以鬼道惑衆　於是國人共立為王　有男弟佐卑彌理國　其王有侍婢千人　罕有見其面　唯有男子二人給王飲食通傳言語　其王有宮室樓觀城柵　皆持兵守衛　為法甚嚴　自魏至于齊梁代與中國相通

開皇二十年（六〇〇年)、倭〈倭〉王、姓は阿毎、字は多利思比孤、号は阿輩雞彌（あまきみ）（＝天皇)、遣使を王宮に詣でさせる。(「隋書」倭〈倭〉国伝）　第一回遣隋使の記録である。この倭国は福永の云う「倭国本朝（筑紫王朝)」であろう。大業三年（六〇七）に第二回遣隋使を出し、「日出處天子致書日沒處天子無恙」云云の国書を送った。阿毎多利思比孤はこの国書に云う「日出処天子」であり、平安朝以後に出現する「聖徳太子」の原像と言ってもよい男帝と考えられる。

明年　上遣文林郎裴清使於倭国　度百濟行至竹島　南望聃羅國經都斯麻國迴在大海中　又東至一支國　又至竹斯國　又東至秦王國　其人同於華夏以為夷洲疑不能明也　又經十餘國達於海岸　自竹斯國以東皆附庸於倭



明くる年（大業四年六〇八)、お上（煬帝）は文林郎の裴世清を派遣して倭国へ行かせた。百済へ渡り、竹島（石田敬一氏の右図参照）に至る。南に聃羅国（済州島）を望み、はるかな大海の中にある都斯麻（つしま）國を経て、また東の一支（いき）國へ至る。また竹斯國へ至り、また東の秦王（しんのう）国に至る。その人は中国人と同じで、夷洲と考えるが、はっきりしたこ

とはわからない。また十余国を経て海岸に到達する。竹斯國以東はみな倭に付属している。
この記事の「東の秦王国」とは福永の云う「倭国東朝（豊国王朝）」のことであろう。福岡県の東西に二つの倭国が併存した。魏志倭人伝に云う邪馬台（やまと）国は三世紀から七世紀まで福岡県にあったことになるのではないか。
日本書紀推古紀の次の記事が隋書倭国伝に対応する。

（推古）十六年**夏四月**、**小野臣妹子**至自大唐。唐国號妹子臣曰蘇因高。即大唐使人**裴世清**・下客十二人、從妹子臣**至於筑紫**。遣難波吉士雄成、召大唐客裴世清等。爲唐客更造**新館**於難波高麗館之上。六月壬寅朔丙辰、客等泊于難波津、是日以飾船卅艘迎客等于江口、安置新館。於是、以中臣宮地連烏磨呂・大河内直糠手・船史王平、爲掌客。

推古十六年（六〇八）、夏四月に隋の裴世清らは小野妹子に従って筑紫に来朝した。隋客のために新館が造られた。これこそ福岡城に出土した「鴻臚館」であろう。隋の朝命を倭国本朝に伝達し終えた裴世清らは「戒塗（道を改め）」して、阿蘇山（＝香春三ノ岳周辺の山）を経、秋八月に秦王国（豊国）を訪れた。彼らを推古天皇の京（行橋市須磨園）、海石榴市（つばきいち）の衢（ちまた）に迎えている。九月十一日に隋の客裴世清が帰る。小野妹子を大使とし（第三回遣隋使）、「東の天皇、敬みて西の皇帝に白（もう）す。季秋、薄（ようやく）に冷し。尊（かしこところ）、何如（いかが）に。」の辞（国書）を倭国東朝の推古天皇（女帝）が小野妹子に持たせた。
第四回遣隋使（六一〇年）を出した倭国本朝は、隋が六〇八年に「琉球国の夷邪久国（屋久島）」を攻めていたことから遂に国交断絶した。他方、倭国東朝は「推古廿二年（六一四）六月丁卯朔己卯、遣犬上君御田鍬・矢田部造闕名於大唐」とあるように第五回遣隋使を単独で派遣している。
（舒明）四年（六三二）十月四日、唐の高表仁が難波津（行橋市）に到着。倭国東朝の歓待を受ける。五年（六三三）一月二十六日、高表仁が筑紫から唐に帰る。この直前、「輿王子（筑紫君薩夜麻、阿毎多利思比孤の孫、後の天武天皇）爭禮、不宣朝命而還」（『旧唐書』）。倭国本朝は隋に続き唐とも国交断絶したようだ。
皇極天皇四年（六四五）六月十二日、中大兄皇子らが飛鳥板蓋宮（福原長者原遺跡第一期遺構）大極殿内で蘇我入鹿を討ち、翌日、入鹿の父の蘇我蝦夷が自害する。乙巳の変。
天智二年（六六三年）秋八月壬午朔戊申（二十七日）倭国本朝、白村江に敗戦。**筑紫君薩野馬**、唐の捕虜のまま敗戦を知る。
天智三年（六六四年）筑紫君薩野馬帰朝、翌年天智天皇の皇太弟となる。（皇太弟とは「天皇の弟分」の地位）

海外国記曰、**天智天皇三年**四月、大唐客来朝。大使**朝散大夫上柱国郭務悰**等卅人・**百済佐平禰軍**等百余人、到_**対馬**島_

天智天皇九年（六七〇年）春二月に、戸籍（庚午年籍　唐の冊封下に入る）を造る。
倭国、更めて**日本**と号す。自ら言ふ。日出る所に近し。以に名と為すと。（三国史記　新

羅本紀文武王十年十二月）
天武天皇元年（六七二年）六月～八月　壬申の大乱
壬申の大乱は豊君の天智天皇と筑紫君薩野馬すなわち後の天武天皇との直接の戦いではなかったか。

おわりに
『隋書』倭国伝には、明らかに、裴世清が筑紫国と秦王国（豊国）を訪れたことが記してあり、これに『日本書紀』推古天皇紀の記事が対応している。しかも、『魏志』の「邪馬台国」を継承した王朝に、裴世清は使いしたようだ。筑紫国に「日出処天子」がおわし、その都が大宰府と考えられるとき、前畑遺跡の発掘によって、大宰府の周囲に51㎞におよぶ「羅城」が確認されている。日本唯一の遺跡である。また、秦王国（豊国）には推古天皇がおわし、その陵がみやこ町の「綾塚古墳」ではないかと推測されている。福岡県の東西に「（両）都」の跡が確認され、そこが『魏志』の「邪馬台国」を継承した王朝であるなら、邪馬台国九州説はもう少し研究する余地があるのではなかろうかと考える。

第６話　　俾弥呼の『宮都』の考察　　大阪府立大学講師　正木裕

はじめに
今回、久留米大学公開講座においての講演についてまとめた。

要旨
● 『魏使の里程は邪馬壹国の所在を証す』:『魏志倭人伝』（『三国志』魏書東夷伝倭人）には、景初２年（西暦238年）に魏の明帝に邪馬壹国の女王俾弥呼が遣使し、正始元年（240）には、建中校尉梯儁らが魏から女王国に派遣された。その際の里程は『倭人伝』に、帯方郡から邪馬壹国（女王国）までは12000余里と記されている。『東夷伝』韓条には「韓地は一辺（方）4000里」とあり、実距離は約300㎞だから、１里約75m程度となる。これを漢代の１里約435mの「長里」に対し「短里」と呼び、その存在は西周の時代（紀元前1050年～771年）頃成立の天文・算術書「周髀算経」によっても確認されている（注１）。そして、その位置に異論のない怡土平野の伊都国に至るまでの各国間の「部分距離」の合計は10500里で、これに対海国（方400里）・一大国（方300里）を通過するための各半周の合計1400里（400×２+300×２＝1400）を加えれば11900里となる。12000里から11900里を引けば100里で、伊都国から不弥国までの「東行100里」と一致し、不弥国から南の邪馬壹国までの残距離は「ゼロ」、つまり「接している」ことになる。また、邪馬壹国の戸数は７万戸とあることから、「邪馬壹国は博多湾岸の不弥国と『接し』、その南方に広がる大国」になる。
● 『王都の所在地は「都市」』:『魏志倭人伝』には邪馬壹国の中の「俾弥呼の宮都」に存在すべき「物や施設」が示されている。具体的には、①宮室・楼観・城柵。②租賦を収める邸

閣（倉庫）。③交易市場。④大倭・大夫難升米・都市牛利、大夫伊声耆・掖邪狗等の官僚群の居所と執務する役所。⑤兵士・奴婢百余人等の住居・居館。⑥文書外交に必要な文具。⑦魏からの下賜品（鏡・刀・絹等）だ。従来、銅鏡などの「物」が重要視されてきたが、「物」は移動し、墳墓に埋葬されることも多く、必ずしも宮都（宮の所在地）に存在するとは限らない。そこで近年重視されてきたのが「俾弥呼の時代の都市化の状況」だ。俾弥呼の宮都は前記の施設が集中し集約された地域であり、それは「都市」であるはずだからだ。

● 『都市化の研究の伸展』：2018年12月に大阪歴史博物館の「古墳時代における都市化の実証的比研究」シンポジウムにおいて、「俾弥呼の時代に、全国でもっとも都市化が進んだ地域は、JR博多駅南の那珂川と御笠川に挟まれた台地上に広がる比恵・那珂遺跡地域で・・他にはなく、『初期ヤマト政権の宮都』とされる纒向遺跡においては、そのような状況は依然ほとんど不明である」（福岡市埋蔵文化財課久住猛雄氏）と報告された（同シンポジウム資料集。大阪文化財研究所編）。これを裏付けるように、2020年８月に採用された炭素年代値の較正曲線（INTCAL20）を用いた測定で、従前の較正曲線（INTCAL13）では３世紀が有力とされた箸墓は、AD290年～340年の可能性が最も高いと判定できる。

『魏志倭人伝』記載の施設を「遺跡」と照合すれば、宮室は「居館遺跡」、楼観は「超大型建物遺跡」、城柵「柵列遺跡」、邸閣は「倉庫群」となるが、発掘の結果では、比恵遺跡の「高床式倉庫群は『倭人伝』の邸閣領域と推定」「一号環溝には超大型建物があった可能性があり・・また二号環溝における大規模化は「居館」的な方形環溝の主が首長から王への変化を示しているとみられる。」（久住）とされる。

● 『半島との交易施設と器具』：また、石重り・辰砂・鉄器・鉄素材・鈴用とみられる小銅鐸・各地からの土器などが出土することから、「市」と推定される遺構も発見されている。2020年12月に那珂遺跡と隣接する須玖遺跡群で発見された石権（石重り）は、韓国・慶尚南道の茶戸里遺跡で発見された青銅製の権と同じ基準値（11g）と単位（10進法）で半島との交易が証明された（春日市教育委員会2021年9月1日発表）。（畿内の石権は基準値（8.7g）単位（８進法）で半島と異なる）。さらに、「市」付近から南に２㎞に及ぶ、こうした施設を縦断する、俾弥呼の時代の「側溝を持つ道路」が確認された。

● 『人口の集中』：比恵・那珂遺跡には、福岡県の同時期の井戸800中500が存在し、人口は少なく見積もっても3000人以上と推定される。つまり比恵・那珂遺跡は、官僚群・兵士・奴婢、交易関係者が居住しそれぞれの機能を発揮することができる「都市」を形成していたことになる。久住氏が「弥生終末期以降は「王」が比恵・那珂に移転してきたとみられる」という見解をも示しているように比恵・那珂遺跡は俾弥呼の時代の宮都に相応しい地域となろう。

● 『文書外交を証明する硯』：さらに、『魏志倭人伝』には「文書・賜遣の物を伝送して女王にいたらしむ」とあるが、こうした文書外交には筆記具が不可欠だ。そうした筆記具である「硯」が、2016年に柳田康雄国学院大客員教授らにより三雲・井原で発見され、その後福岡全域で発見が相次いだ。しかも使用された痕跡も残されていた。2017年に比恵遺跡から出土した硯は、遺跡の年代から３世紀のものとされており、俾弥呼・壹與の時代と一致する。また福岡全域で出土していることは７万戸とされる邪馬壹国の領域の広がりを示すものといえる。

その後、さらに古い年代の硯も発見され、筑前町薬師ノ上遺蹟出土の硯には、使用された事を示す痕跡が残っていた。年代は、弥生後期初頭～前半、AD1世紀ごろで、これは「志賀島の金印」が下賜された時代にあたる。つまり、57年に後漢に朝貢し、光武帝から金印を下賜された倭奴国王は「文書による外交」をおこなっていたことになる。

● 『五尺刀の素材分析―「三角縁神獣鏡」は俾弥呼の鏡にあらず』：加えて、俾弥呼へは五尺刀２口が下賜されており、漢代の１尺は23～24㎝だから120㎝程度の刀と考えられるところ、糸島市前原東の上町向原遺跡から弥生最長の1189㎜の素環頭大刀が出土している。この刀について、2003年の日本文化財科学会第20回大会で、１世紀後半から２世紀前半に中国産の鉄鉱石で作られたものと発表され、俾弥呼への下賜品の可能性が高まっている。

８、『鉛同位体の分析による鏡の制作地の判明』：魏よりの下賜品「銅鏡100枚」について、畿内中心に出土する「三角縁神獣鏡」は、邪馬壹国九州説では、①中国からの出土が無いこと、②百枚の下賜に対し五百枚を超える出土があること、③「景初四年」など存在しない年号が記されていること、④鏡面に記す漢文に乱れがあることから仿製鏡（国産）であり、下賜されたのは北部九州中心に出土する漢鏡だと考えてきた。この点、新井宏氏ら冶金学者らによる「鉛の同位体」での銅鏡制作地の特定が進み、「三角縁神獣鏡」が国産であることがより明らかになってきた。

銅鏡に添加されている「鉛」には、質量数が204・206・207・208の四種類の同位体があり、その比率により産地を知ることが出来る。この「鉛同位体の分析」の結果、三角縁神獣鏡を始め魏の年号を持つ鏡の殆どに、韓国（全州鉱山）や我が国の岐阜県神岡鉱山などの鉛が添加されており、これらが中国製ではなく、仿製鏡（国産）であることが改めて確認された。

９、『現地の学芸員の見解の変化』こうした新たな研究の伸展を受け、2020年９月に、橿原考古学研究所で、長年纒向遺跡をはじめ、多くの大和地域の発掘・調査に携わってきた関川尚功氏が「考古学から見た邪馬台国大和説 畿内ではありえぬ邪馬台国」（梓書院2020年９月20日）を出版。「邪馬台国の存在を大和地域に認めることは出来ない」との見解を発表している。

このように『魏志倭人伝』等の文献上の研究に加え、遺跡・遺物の発見や、科学的検討の進展で、邪馬壹国の領域は博多湾から九州北部に広がると推測され、その中で比恵・那珂遺跡群が俾弥呼の時代の宮都として最も可能性が高くなってきている。今後、同地域での発掘や調査が一層進み、俾弥呼の宮都の所在がより一層明らかになることを期待する。なお、以上の見解は拙著「改めて確認された博多湾岸の俾弥呼の宮都」（『俾弥呼と邪馬壹国』明石書店2021年３月30日）に詳述されている。

（注１）『邪馬一国の証明』（角川書店1980年10月14日）解説にかえて。魏志倭人伝と短里―『周髀算経』の里単位（谷本茂氏）による。

おわりに

それぞれの講師の著述物について紹介する。古田史学会については、発行書籍多数のため近年のものとした。本学公開講座における内容も含め、九州の歴史民俗学についての参考にあるものと考える。

綾杉るな

神功皇后伝承を歩く〈上〉福岡県の神社ガイドブック　不知火書房　2014
ISBN-13 : 978-4883450275

神功皇后伝承を歩く〈下〉福岡県の神社ガイドブック　不知火書房　2014
ISBN-13 : 978-4883450282

内倉武久

太宰府は日本の首都だった―理化学と「証言」が明かす古代史
（シリーズ・古代史の探求）　ミネルヴァ書房 2007
ISBN-13 : 978-4623032389

卑弥呼と神武が明かす古代―日本誕生の真実
（シリーズ・古代史の探求）　ミネルヴァ書房 2007
ISBN-13 : 978-4623049868

伊藤まさ子

太宰府・宝満・沖ノ島―古代祭祀線と式内社配置の謎　不知火書房　2014
ISBN-13 : 978-4883450299

古賀達也、福永晋三

九州王朝の論理　明石書店　2000
ISBN-13 : 978-4750312934

古賀達也

「君が代」、うずまく源流（市民の古代）　新泉社　1991
ISBN-13 : 978-4132110448

古賀達也、正木裕（古田史学の会）

古代に真実を求めて――
「古事記」「日本書紀」千三百年の孤独:消えた古代王朝　明石書店　2021
ISBN-13 : 978-4750349985

倭国古伝―姫と英雄（ヒーロー）と神々の古代史　明石書店　2020
ISBN-13 : 978-4750348193

発見された倭京―太宰府都城と官道　明石書店　2019
ISBN-13 : 978-4750346496

俾弥呼（ひみか）と邪馬壹国（やまいこく）―
古田武彦『「邪馬台国」はなかった』発刊五十周年　明石書店　2021
ISBN-13 : 978-4750351810

失われた倭国年号《大和朝廷以前》　明石書店　2017
ISBN-13 : 978-4750344928

盗まれた「聖徳太子」伝承　明石書店　2015
ISBN-13　:　978-4750341538
古代史の争点―「邪馬台国」、倭の五王、聖徳太子、大化の改新、藤原京と王朝交代
明石書店　2022
ISBN-13　:　978-4750353784
倭国古伝―姫と英雄（ヒーロー）と神々の古代史　明石書店　2019
ISBN-13　:　978-4750348193

邪馬壹国の歴史学:「邪馬台国」論争を超えて　ミネルヴァ書房　2015

福永晋三
真実の仁徳天皇
―倭歌が解き明かす古代史―　不知火書房　2015
ISBN-13　:　978-4883451036
「魏志倭人伝を解く」序章 邪馬台国田川説の濫觴
―倭歌が解き明かす古代史―　同時代社　2021
ISBN-13　:　978-4886839060